



1 明北小児童会『児童総会』

2月13日（金）

児童会役員退任のあいさつ（児童会長）

今日は、第2回児童総会でしたね。来年度に向けて、たくさんの意見が出た総会になりました。それぞれが、自分のこととして考えていいなと思いました。

さて、みなさん、今年度のスローガンは覚えていますか？今年のスローガンの内容は、「明るく仲良く 夢に向かって歩み続ける明北小」でした。



僕は、ちょうど1年前くらいに、全校アンケートを取りました。内容は、『**どんな明北小になったらいいか**』でした。この全校アンケートを取った理由は、僕たちだけの意見でスローガンを作るのではなく、全校のみんなの意見を取り入れてスローガンを作ろうと思ったからです。その方が、**全校のみんなが望む学校になる**と思ったからです。その結果、全校のみんなから「楽しい学校が良い」や「明るく仲良しな学校がいい」などの意見がたくさん出ていました。僕も、明るくて仲がよく、そして楽しい、そんな学校がいいなと思っていました。このように、**今年のスローガンは、全校みんなの思いが入って生まれたスローガンです。**

このスローガンを達成するために、各委員会もそれぞれ考え、具体的な活動を頑張ってきました。それなので、今年は新しく、「交流委員会」という委員会もできました。

各委員会が、縦割り班の企画や全校でやる遊びなどの具体的な企画を入れて、できるだけスローガンを達成できるようにしました。今年はそうやってみんなで児童会を作ってきました。

今、今年の活動を振り返って、今年は全校がたくさんの活動に参加でき、他学年の人たちとも交流できて、学校に笑顔が増えてきたと思います。本当にスローガン通りの学校だったと思います。

さて、次は、いよいよ5年生にこの学校を託します。今の学校もいいと思いますが、これより明るく仲の良い学校になったらいいと思います。どうか、この学校をもっと楽しく笑顔が多いハッピーな学校にしてください。

明北小でも、明南小でも、1年間の児童会活動のまとめとなる「児童総会」が行われました。昨年度、明北小では、児童会役員選挙前に全校アンケートを行い、その内容を元にして、立候補者が選挙公約を考え選挙を行いました。実現に向けた取組が受け入れられ、楽しく充実した結果をもたらしたのは、各委員会が、年間通してブレずに全校児童の願い（みんなの思いで生まれたスローガン）を大切にして活動を企画・推進してきたからこそだと思います。

『児童総会』（6学年だよりから）

児童会活動、最後の大事な仕事が終わりました。もはや何の心配もありませんでした。最後にふさわしい堂々とした姿を見せてくれました。

児童総会開催にあたり、議案書作成や会場準備など、自分たちでやるのが当たり前の子どもたち。全員が気持ちよく働きます。叱ったり大きな声を出したりする必要は全くありません。私は出来上がってきた議案書をチェックし、修正するところを伝えたり、他学年から出てきた質問や意見などへの返答の仕方の相談に乗ったり、一緒に会場準備をしたりしました。そういった些細な時間が私は好きです。変に構えることなく、子どもたちのパートナーで在れる幸せがそこにあります。

（パートナー：人生や仕事において、お互いを尊重し、信頼し合って支え合う、対等な相棒）

2 明南小4年生総合『プロジェクトXまとめの発表』 2月13日（金）



13日（金）明南小高学年参観日に、4年生は、総合的な学習で1年間取り組んできた『プロジェクトX』のまとめの発表を行いました。子どもたちの希望をもとに立ち上げた、「伝統・ボランティア・お弁当・野菜・プログラミング・作って売る」の各グループが、電子黒板も使い、活動してきたことをメンバーで分担して発表しました。保護者のご協力のもと、グループによっては中学生にアドバイスをもらったりしながら進めてきた取り組みです。発表では、自分たちで考えて実現したことの喜びや、必要に応じてクラス全員で活動に取り組めた楽しさ等も語られました。

「楽しかったこと・嬉しかったこと・協力できたこと」の他に、ほとんどのグループで語られていたことがあります。それは、『**上手いかなかったこと・大変だったこと・難しかったこと**』です。しかも、その状況や理由が具体的に語られていたことです。

担任が子どもたちに委ねることで、子どもたちは、自分がやりたいことに、自分のやり方でチャレンジしてきました。その中で、思うようにいかずに立ち止まったり、挫折したり、やり方を変えたりしなければならないことに、幾度となく出くわしたはずですが、体験を通してチャレンジしたからこそ得られたこれらの経験は、これから新たな取り組みに向かう糧として、子どもたちの心に残り、活かされる場面がきっとあるはずですが、子どもたちが、それぞれの願いに向けてチャレンジする過程を、我々大人が伴走支援者としてどのようにサポートしていけばよいのか、今後も考えていきたいと思えます。